大島高校生物部　部誌ＯＲＩＥＮＳについて

理科（生物）教諭　　金井　賢一

大島高等学校生物部は，ここ数年活動なされていない状態にある。

しかし古い時代から存在しており，2002 年に発行された創立 100 周年記念誌「安陵」478 ページには，昭和 31 年（1956 年）に撮影された，生物部員の写真がある（上図）。そんな伝統ある大島高校生物部の機関誌 ORIENS を，本校に赴任してすぐに図書館倉庫のロッカーに見いだした。創刊号は 1959 年 11 月 21 日，当時の文化祭に併せて作成されたようである。その後たびたび中断されながら発行され，1975 年１月：10 号までが保存されている。特に創刊号は紙も悪くなり，なかなか図書館で公開できる状態にはないので，この機会に 10 冊の中身をまとめておき，且つ今後発行していく期待を込めてこの報文をまとめる。

創刊号（1959 年 11 月 21 日発行）

：表紙は赤インクでルリカケス

p.1　創刊号発刊に当り　（圓野憲武）
p.2　龍郷採集記　（圓野憲武）
p.3　体液の組成と作用　（南　平一郎）
p.8　山羊島植物分類（１）
p.11　入部して　（重原和子）
p.12　滅びゆく動物「ざん」　（圓野憲武）
（注：「ざん」とはジュゴンのこと）
p.13　校内植物分類（１）
p.15　イネの一生　（南　平一郎）
p.17　部記，貝類分類　（上原富明）
p.22　奄美を訪れし自然科学者（顧問　森田忠義）
p.23　プランクトン採集　（川内且昭）
p.28　ときわぎ
p.29　３３年度生物部活動実績，部員紹介
p.30　沖永良部島採集記　（南　平一郎）
p.32　後記

【内容について】

発刊と言うことで，非常に力の入った内容になっている。プランクトン採集や植物観察旅行などの野外活動のみならず，体液や血液凝固に関する研究も掲載されている。文化祭に合わせて発刊したとのこと，これを資料として文化祭で生物部の展示を行ったのであろう。

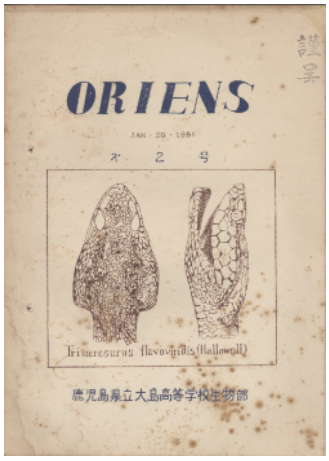
また顧問による投稿もあり，森田忠義氏の「奄美を訪れた自然科学者」には当時鹿児島大学文理学部動物学教授であった故平田国雄氏（S29～34 まで毎年来島）や当時九大分校所属：後の九州大学名誉教授の故白水隆氏（S31 来島），当時国立予防衛生研究所昆虫部長である朝比奈正二郎（S34 来島）などの記録もあり，昭和 28 年に本土復帰を果たした奄美大島に対する，当時の生物学者の高い注目が見てとれる。白水博士の文献メモを整理したデータベース(白水，2005)には，ORIENS として 11 件のチョウの記録が登録されている。

第２号（1961 年１月 30 日発行）

表紙は２色刷でハブの側面図及び上面図

p.1　巻頭言（顧問　大野隼夫），表紙解説
p.2　ハブ生態研究所を訪ねる　（2 年　川野義克）
p.4　近辺の貝分類　（3 年　上原富明）
p.7　帰化植物に寄せて　（顧問　大野隼人）
p.10　名瀬港内のプランクトンの分類　（3 年　川内且昭）
p.11　湯湾岳採集旅行　（1 年　政　定好，2 年　丸野勝寛）
p.18　長者貝について　（3 年　上原富明）

p.19　植物群落の季節的変化
（2 年　葛城九美子，2 年　仰　久子）
p.21　カエル採集記　（3 年　川内且昭和）
p.24　アワビ　（3 年　上原富明）
p.24　奄美群島の哺乳類（MAMMALIA）
（顧問　森田忠義）
p.27　ジュゴンについて　（1 年　栗園重弘）
p.30　35 年度部記，採集記録記
ほか編集後記



【内容について】

昭和 35 年度（1960 年度）の生物部の部員は 23 名を数えている。4 月当初 40 名を越えていたというので，この時代の生徒の関心が見てとれる。活動内容には，湯湾岳への採集旅行が見られた。４泊５日の行程で，名瀬港からポンポン船で大和浜まで行ってから徒歩で移動する様子は，現在の交通事情からは全く想像できない。また本茶峠でオットンガエルを採集し，その大きな心臓を用いて心臓かん流実験を計画・実施するなど，興味関心を持ったことに対して実行力が伴っているのに驚嘆する。

文化祭でカエル・ネズミの解剖を行っているのは時代であろうか。

第３号（1962 年１月 20 日発行）

：表紙はアマミノクロウサギ

巻頭言，表紙解説
p.1　徳之島一周採集記（2 年　栗原重弘，政　定好）
p.9　心臓人工潅琉　（2 年　福地瑞也）
p.17　朝戸峠夜間採集記　（3 年　丸野勝寛）
p.19　珍奇な奄美の獣三態　（顧問　森田忠義）
p.21　採集放談　（葛城九美子，斉藤智得子）
p.26　洞穴　（3 年　川野義克）
p.26　校内樹木の素顔　（顧問　大野隼夫）
p.30　リュウキュウヒメジャノメの成長
（2 年　政　定好）
p.31　奄美独特の生物　（3 年　川野義克）
p.36　奄美秋の七草　（池　由紀子,中川淳子）
p.36　奄美特有の植物　（池　由紀子,中川淳子）
p.37　Rh 因子について　（1 年　中山健男）
p.38　タテノカオ
p.40　奄美大島のカエル　（3 年　丸野勝寛）
p.44　極　性　（1 年　浜崎常隆）
p.45　生物部員の採集した蝶の分類
p.47　部記，生物部員名簿
p.48　編集後記

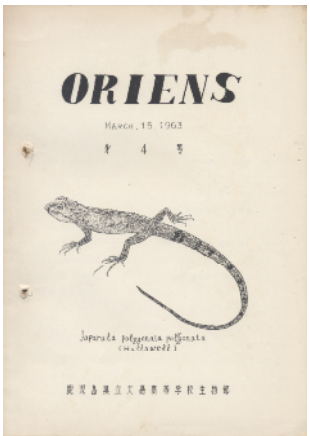
【内容について】

興味深い報文として，森田忠義氏によるほ乳類３種がある。当時まだ謎の生物であった「ムアンムキ」は，リスに似た動物で目が異様に輝き，尾にふさふさした毛が生えているという。老樹木に棲み人家から山中に見られるとのことであり，これはケナガネズミのことであろうか？昭和35年12月６日笠利町喜瀬（鯨浜）にてジュゴンが捕獲されたとのことである。今も珍しいが当時も珍しく，保護していこうという気持ちが書かれている。昭和 35 年（1960 年）12 月 14 日，加計呂麻島渡連沖から古仁屋方向に向かってリュウキュウイノシシが泳いでいるところを人夫がしとめたとの記録がある。これにより，加計呂麻島にもリュウキュウイノシシが生息していることが確認された。

この ORIENS では，生物和名に極力学名を併記しようとされている。これは顧問の意向であろうが，非常に良い取り組みと思われる。今の生徒は学名の存在について知るのは生物Ⅱの単元「系統」であるが，実際この単元はセンター試験後にしか触れることができない。やはり博物学的な生物への接し方が近年失われていることの表れであろう。

第４号（1963 年３月 20 日発行）

：表紙はキノボリトカゲ



p.3　巻頭言　（顧問　大野隼夫）
p.5　崎原採集記　（2 年　伊藤ムツ代）
p.11　熱帯医学研究所訪問記
（2 年　川崎三重子，泉雅子）
p.14　ちょっとした実験　（3 年　政　定好）
p.15　入部して　（1 年　森田盛政）
p.16　ハブ生態研究所を訪問して
（2 年　荒垣美保子，川元栄子）
p.18　おもしろい事
p.19　コケについて　（3 年　栗園重弘）
p.24　イワカワシジミについて
p.26　血液型判定　（2 年　森田房子，福原孝代）
p.28　血液型と学力　（1 年　平瀬吉麿）
p.32　ミドリムシ　（2 年　浜崎常隆）
p.34　奄美の花　アマミセイシカとその
近縁種（顧問　大野隼夫）
（p.31～p.38 個人点評）
p.38　部記　昭和 37 年度
p.39　生物部員名簿　昭和 37 年度
p.40　編集後記

【内容について】

1946 年から始まったチョウの生活史解明は，1962 年の原色日本蝶類幼虫大図鑑 vol.Ⅱ（白水・原）が発刊され，数種を残してほぼ解明されていた（福田，2000）。本号に収められているイワカワシジミの幼虫の生活についても，初記録ではない。しかし，多くの図鑑で簡単に触れられている幼虫の食草利用について，「実のない時には花を食し，その際も実を利用するのと同様に潜り込んでめしべ・おしべ，子房を食する」という記述は，その生活史解明の手法を強く意識した記述である。

また，文化祭での生物部展示で「血液型無料判定」をしたところ 352 名の希望者が殺到して，大変だったとある。その際の ABO 式血液型の比が日本の血液型係数と一致していたという，非常に面白い結果が得られている。なお，現在はこの血液型判定の際の血液採取が医療行為とされており，一般人が他人を傷つけて採血することは学校現場でも禁止されている。

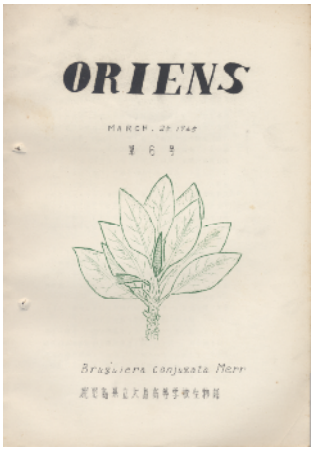
第５号（1964 年 2 月 29 日発行）：表紙はイシカワガエル

p.2　ORIENS５号に寄せて　（顧問　大野隼夫）
p.3　採集遠足（本茶峠）　（3-5　荒垣美保子）
p.7　奄美の植物　（3-5　川元栄子）
p.18　心臓の拍動の実験　（2-4　池田秀秋）
p.20　ハブについて　（2-3　大屋　晃）
p.22　奄美有用植物目録　（顧問　大野隼夫）
p.32　旅行記　（1-2　楠田哲久）
p.35　奄美の新しい化学産業（パパイン）
（2 年　鬼塚，平，清正，牧山）
p.37　安勝山の植物　（3-5　川崎三重子，泉　雅子）
p.42　メクラヘビ　（1 年　T．K，T．M）
p.44　白蟻の腸に　（2-3　安田隆昌）
p.48　入部して（1-2　有島節子，横内文江，
福地カツミ，悦田和代）
p.51　編集後記

【内容について】

着実に活動を継続している様子がうかがえる。オットンガエルをもちいて心臓の拍動をキモグラフで記録する実験，顧問の大野先生と共に本茶峠にて植物採集する様子など，和気藹々と活動している様子が記述されている。校内でメクラヘビが採れたという状況，現在の新校舎からは想像できない。「うらやましい」と言ってしまえばそれまでだが，現在の大高の環境でも充分調査対象はあるはずである。

第６号（1965 年３月 25 日発行）：表紙はオヒルギ

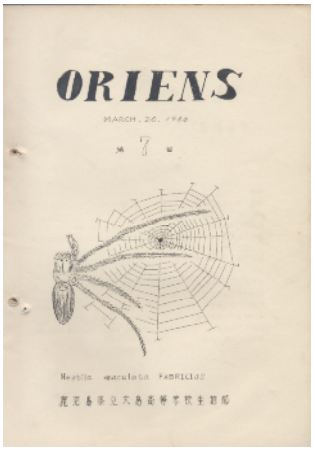


p.2　序にかえて　（顧問　大野隼夫）
p.3　真珠の養殖（2-8　生野順子，得千代美，昇　悦子，盛　礼子）
p.8　本茶峠の春　（2-5　当田謙隆）
p.10　笠利への採集遠足　（1-5　杉岡　衛）
p.12　八津野採集会　（2-9　荒垣京子）
p.17　植物採集　（2-4　新島成喜）
p.24　園芸部日記から　（2 年　野口和代）
p.28　入部して　（1-9　浜畑美喜子，長嶺フキ子）
p.29　名瀬市産蜘蛛類目録　（1-3　寺師寿生）
p.31　だせん染色体の観察　（1-2　西　保吉）
p.33　茶粉の発芽　（2-4　大窪恵子）
p.37　魚類半面はく製　（3-5　平瀬・永島）
p.42　甲虫
p.47　花を育てる喜び　（2-6　福地カツミ）
p.48　ある日の観察　（3-5　平瀬吉麿）
p.49　オオミズナギ鳥　（2-5　楠田哲久）
p.51　シュミット博士の思いで　（文　英吉）
その他「個人点評」「後輩へ」「先輩へ」「部記」「生物園芸部部員名簿」編集後記

【内容について】

この年は３回もバスを借り切って採集に行くなど，生物部としての活動は活発であったようである。文化祭の展示でも，来室者は 1500 名を越えたと編集後記にある。しかし巻頭言には大野隼夫氏による「奄美の環境破壊・山林伐採・道路建設」「部活動の質の低迷」などが述べられており，大きな希望と方向性を求めて活動が進んでいくことを期待させている。また，昭和 31 年（1956 年）当時奄美日米文化会館館長であった文　英吉氏の寄稿を載せたものである。このように部活内のみならず奄美大島の知識人から寄稿を受けるなど，活発な活動がなされている。

第７号（1966 年３月 25 日発行）：表紙はオオジョロウグモ



p.2　三つの壁と７才のオリエンス（顧問　大野隼夫）
p.3　秋名採集会を終えて　（1-2　川畑とし子）
p.4　入部して　（1-6　平岡富子）
p.5　“植物”への興味　（1-2　吉原喜代子）
p.6　細胞とその染色法　（2-1　南　正人）
p.8　奄美のチョウ，その他　（2-1　唯吉邦敬）
p.11　奄美大島産コガネムシ科　（Ｙ．Ｓ．）
p.18　名瀬港内のプランクトン（2-2　清正　斉，2-1 唯吉邦敬）
p.21　奄美群島植物メモ　（顧問　大野隼夫）
p.51　再生実験　（1-6　里　新勇）
p.58　血液型［Blood type］（3-7　生野順子・盛田礼子）
p.64　酵素　（2-1　南　正人）
p.68　クモ紹介
p.70　ある日の観察から　（2-2　寺師寿生）
p.71　奄美大島陸産蛇類　（2-1　春野良一）
p.76　園芸部日誌より　（2-1　福田恵子）
その他「個人点評」「生物園芸部部員名簿」編集後記

【内容について】

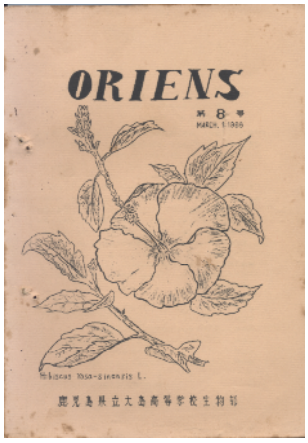
ORIENS 史上最大のボリュームを持つ本号は，生徒によるオタマジャクシの再生芽実験，顧問大野隼夫氏による植物図を掲載した植物覚え書きなど，実際の活動に基づくものが見られる。

なお，ORIENS の文中に採集場所や採集日時が記載されていないのが悔やまれる。記録として引用するためには，最低限「採集年月日」「採集場所」「採集者」のデータが揃っていなければならない。これらのデータを欠いた標本には学術的価値がほとんど無く，いわゆる装飾品と変わらない価値しか持たない。ぜひ生徒と共に活動しながら，そんな話をした

いものである。

大野氏の巻頭言によれば，多忙にて生徒にほとんど指導助言できなかったらしいが，生徒たちだけでこれだけの活動をしてきたとある。やはり年月を重ねることにより，先輩たちの活動を引き継ぎ，より良いものを作っていこうとする姿勢も受け継がれるのであろう。

第８号（1968 年３月１日発行）：表紙は仏桑花（リュウキュウムクゲとあるが，サキシマフヨウのことか？）



p.2　はじめに　（顧問　大野隼夫）
p.2　ORIENS の由来，特報
p.3　奄美の蝶数種について　（1-7　川口佳宥）
p.11　～文化祭から～
（１）ウニの内臓観察　（2-4　川元文枝）
（２）卵かく膜による浸透作用　（2-4　池田桂子）
（３）ネズミの解剖　（３年　R．H.）
（４）骨格標本の作り方　（３年　Y.H，K.T）
（５）沖永良部，与論島採集記　（2-2　新里元達）
p.32　大和村滝の川山林に関する報告
（顧問　大野隼夫）
p.43　貝　（３年　M.M）
p.50　トウギョの生態　（2-2　新里元達）
p.53　奄美のバナナの全て　（1-4　森田　広）
p.67　奄美の野鳥紹介　（2-4 宮山　修）
p.71　奄美諸島に生きる両生類　（2-2　新里元達）
p.75　植物園芸
その他「個人点評」「生物園芸部部員名簿」編集後記

【内容について】

部長である新里元達氏は，以前鹿児島昆虫同好会にも所属されており，沖永良部島での生物系同好者として有名な方である。氏の郷里である沖永良部・与論での採集記，そこで採集された闘魚（タイワンキンギョ）の観察記録など，興味深い。また１年生ながらバナナを観察して３年間の記録をまとめた森田広氏の活動も，見ていて感心させられる。

大野隼夫氏による大和村滝の川林道の観察記は，オキナワウラジロガシの奄美北限記録を再確認していることで重要であろう。

第９号（1973 年７月 11 日発行）
：表紙はメスアカムラサキ

はじめに　（顧問　大野隼夫）
p.1　奄美の植生の特異性
奄美の自然保護への提言　（顧問　大野隼夫）
p.8　大高生物部植物班　（１年　岩元，高橋）
p.13　オットンガエルについて　（２年　比嘉清文）
p.14　西表島の自然　（２年　比嘉清文）
p.19　奄美の蝶　（２年　貞　寛昭）
p.21　トゲネズミとケナガネズミ（２年　比嘉清文）
p.22　生物部　（３年　若久恵二）
p.23　夜間採集の心得　（２年　比嘉清文）
p.24　1972 年度生物部の思い出
その他「生物園芸部部員名簿」編集後記

【内容について】

５年ぶりの発行ということで，諸先輩の作り上げてきた経験も一度絶えてしまったようであり，残念である。前号までは手書きの原稿をガリ版刷りしたものを製本していたが，この９号からは印刷業者による漢字タイプライター，印刷製本を採用している。ORIENS 史上初の写真掲載がなされている。この時代の写真印刷は非常に高価であり，それを学校の機関誌で取り入れているところには感心する。

部長比嘉清文氏の活躍がめざましく，単独西表紀行や夜間採集での注意点など，寄稿されている。部員も 19 名ということで人員としては十分であり，活動内容を継続できるかどうかが，文化系部活動の存続を左右すると強く感ずる。

第 10 号（1975 年 3 月 17 日発行）
：表紙はアマミセイシカ（ツツジ科）

p.3　まてばしい（顧問　大野隼夫）
p.5　安勝山の植物　（比嘉清文）
p.13　請島の植物　（比嘉清文）
p.16　野山の薬草　（薬草班）
p.21　新川の生物学的水質判定
（２年　川畑，１年　川畑）
p.26　文化祭を顧みて　（１年　徳　りん子）
p.27　本茶峠採集記　（１年　嘉川　悦子）
p.31　４８年度，４９年度の思い出
その他「生物園芸部部員名簿」編集後記

【内容について】

本校図書館に収蔵されている ORIENS の最終巻である。大野氏の巻頭言には，つい先頃奄美大島で発見されたマテバシイを通して，身近な自然観察から思いもしない大きな成果が得られること，そして自然を観察することによって郷土を愛する心も育つだろうとある。

＊ORIENS に記録されたチョウの記録一覧

筆者個人はチョウを主な対象として昆虫採集をしている。分布変化や寄生者の変遷など生態的ことにも興味があり，過去の記録と現在を比べることにより変化を探ることも可能である。今後記録を利用する際の利便性も考えて，ここに ORIENS に記録されたチョウの記録をまとめておく。

創刊号 p.2-3

1959.VI.28　『奄美大島：龍郷町円集落でアサギマダラの大群を発見。数十頭捕まえる。』

アサギマダラは春から初夏にかけて，南西諸島から近畿・関東・東北地方へ移動するチョウと言われており，マーキング調査によって解明しようとされている。しかし，この記録は６月末のものであり，奄美大島に６月になっても，多くのアサギマダラがいると言うことを記録した点で重要なものであろう。

創刊号 p.30-32

1959.VII.25　『沖永良部島：和泊から国頭を目指して採集を始めた。ツマグロヒョウモン，キチョウ，モンキチョウ，モンシロチョウ～』

２号 p.11-18

1960.VII.20　『奄美大島：大和村４時頃から恩勝の神社に採集に行った。ウスイロコノマチョウ多く～』

1960.VII.21　『大和村大棚にてリュウキュウアサギマダラとアカボシゴマダラ目撃』

『(山を登ると）この辺りの高さからアオバセセリが見えだした。ムラサキシジミ，アマミウラナミシジミも採集した』

『福元は9～10件しか民家が無く～ウスイロコノマチョウ，アオスジアゲハ，カラスアゲハ，ジャコウアゲハなどが多くいた。』

1960.VII.22　『頂上へ登ると，カラスアゲハ，クロアゲハ，アマミウラナミシジミ，ヤクシマルリシジミ，ウラナミシジミが採集できた。』

採集記の後に，記録のまとめがある。採集頭数については不明である。

タテハモドキ	1960.VII.20，大和浜
ウスイロコノマチョウ	1960.VII.20，津名久
アゲハ（ナミアゲハ）	1960.VII.20，大和浜
クロアゲハ	1960.VII.20，恩勝

クロアゲハは 2005 年現在奄美大島では非常に少なく

なっている。2005 年の記録は奄美昆虫同好会主催の標本作製会に小学生が持参していた１匹だけかもしれない。しかし島嶼における種数や個体数の変動は激しいことが有名で，この 1960 年頃はクロアゲハが多かったのか，そのころの他の文献が分からないので判断できない。

モンキアゲハ	1960.Ⅶ.20，恩勝
モンシロチョウ	1960.Ⅶ.20，恩勝
ジャコウアゲハ	1960.Ⅶ.21，大和浜
ツマグロヒョウモン	1960.Ⅶ.21，大棚
アサギマダラ	1960.Ⅶ.21，大棚～福元
キチョウ	1960.Ⅶ.21，大和浜～大棚
カラスアゲハ	1960.Ⅶ.22，福元～湯湾岳
アオバセセリ	1960.Ⅶ.22，湯湾岳
アマミウラナミシジミ	1960.Ⅶ.22，湯湾岳
ツマベニチョウ	1960.Ⅶ.22，福元～湯湾岳
アオスジアゲハ	1960.Ⅶ.22，福元～湯湾岳
ヤクシマルリシジミ	1960.Ⅶ.22，湯湾岳
イシガケチョウ	1960.Ⅶ.23，湯湾岳

３号 p.1-8

1961.Ⅷ.6　『徳之島：山（さん）から手々（てて），タテハモドキ，ツマグロヒョウモン，キチョウ，アサギマダラなどが採れた。』

　ここでも８月にアサギマダラが採集されている。山～手々の山道であろうか，集落付近であろうか，興味深い記録である。

1961.Ⅷ.8　『犬田布岬にてタテハチョウ類やシジミチョウ類がよく採れた。特にオジロシジミとシルビアシジミが採れた～』

1961.Ⅷ.8　『伊仙町阿権に行く途中，ツマベニチョウの雄雌が採れた。』

徳之島採集目録

リュウキュウアサギマダラ	1961.Ⅷ.6　母間
ルリタテハ	1961.Ⅷ.6　山
カバマダラ	1961.Ⅷ.7　浅間
アオタテハモドキ	1961.Ⅷ.8　阿権
シロオビアゲハ	1961.Ⅷ.12　母間
タテハモドキ	1961.Ⅷ.8　阿権
ウラナミシジミ	1961.Ⅷ.8　犬田布
アマミウラナミシジミ	1961.Ⅷ.8　犬田布
シルビアシジミ	1961.Ⅷ.8　犬田布

３号 p.25

1961.XI.23 『（名瀬から戸口までの間に）採集品リストリュウキュウミスジ，テングチョウ，イワカワシジミの卵（クチナシの実に産卵）』

３号 p.30-31

1961.Ⅵ.28 リュウキュウヒメジャノメの成長：7/18 までの卵から 17㎜ まで成長した記録を載せている。

３号 p.45-46

データはないが，生物部員の採集したチョウのリストが掲載されている：

オオゴマダラ（与論島），カバマダラ，スジグロカバマダラ，リュウキュウカバマダラ（同定ミス：おそらくリュウキュウアサギマダラ），ルリタテハ，アカボシゴマダラ，アオタテハモドキ，ツマグロヒョウモン，リュウキュウコミスジ（表記ミス：リュウキュウミスジ），スミナガシ，アカタテハ，イキガキチョウ（表記ミス：イシガケチョウ），タテハモドキ，モンシロチョウ，キチョウ，ツマベニチョウ，モンキチョウ，ナガサキアゲハ，クロアゲハ，アオスジアゲハ，アゲハ，ジャコウアゲハ，カラスアゲハ，オナガアゲハ（同定ミス），シロオビアゲハ，モンキアゲハ，イチモンジセセリ，クロセセリ，オオシロモンセセリ，アオバセセリ，ヤマトシジミ，イワカワシジミ，ムラサキシジミ，ウラギンシジミ，ウラナミシジミ，シルビアシジミ，アマミウラナミシジミ，ウスイロコノマチョウ，リュウキュウヒメジャノメ，テングチョウ

４号 p.24-25

　データはないが，記録を参考にしながら，飼育したイワカワシジミの様子を記録している：

５号 p.32

1963.Ⅶ.23 『住用村八津野：タテハモドキ夏型５匹.』

７号 p.8-10

データはないが，クラブで採集したチョウの種類をリストにしている：

ジャコウアゲハ，ナガサキアゲハ，アオスジアゲハ，ナミアゲハ，モンキアゲハ，カラスアゲハ，オナガアゲハ（同定ミス），リュウキュウアサギマダラ，アサギマダラ，オオゴマダラ，カバマダラ，スジグロカバマダラ，ミスジチョウ（同定ミス），ウスイロコノマチョウ，タテハモドキ，ルリタテハ，ツマグロヒョウモン，アオタ

テハモドキ，イシガケチョウ，リュウキュウミスジ，アカタテハ，アカボシゴマダラ，ツマベニチョウ，モンシロチョウ，キチョウ，モンキチョウ，ウラナミシジミ，ヤマトシジミ，ウラギンシジミ，ムラサキツバメ（注目種），アマミウラナミシジミ，ムラサキシジミシルビアシジミ，テングチョウ，ダイミョウセセリ（同定ミス：おそらくクロセセリ），アオバセセリ，キマダラセセリ（不明種），オオシロモンセセリ，チャバネセセリ

オナガアゲハ，ミスジチョウ，キマダラセセリなど奄美大島には分布していないとされる種名が見られる。おそらくクロアゲハ，リュウキュウミスジの同定ミスと思われるが，キマダラセセリに間違えそうな種は，現在の奄美大島には見あたらない。キマダラセセリの類縁種としては，寒冷期の遺存種として石垣島にはアサヒナキマダラセセリがいる。イリオモテキマダラセセリという個体も，今までに１個体だけ採集されたことがあるらしい（藤岡，1975）。また，2005 年夏に筆者の友人が瀬戸内町の山中で「キマダラセセリを見た」と言っていたこともある。謎に満ちている奄美のチョウ，非常に面白い。また，ムラサキツバメは 2005 年に金井が採集したのは 10 月のみであり，これは土着種ではない可能性があるとして検討中である。この記録も面白い。

８号 p.3-10

奄美のチョウ数種について（採集者は無印：川口佳宥，Ｙ：山田君-金久中３年生）：

ナガサキアゲハ

1♂（1966.Ｘ.1，浦上），3♀（1966.Ｘ.24，名瀬，朝仁），3♂（1967.Ⅲ.21，名瀬），1♀（1967.Ⅳ.16，名瀬），1♂（1967.Ｖ.27，名瀬），2♂1♀（1967.Ⅵ.10，名瀬），3♀（1967.Ⅶ.21，名瀬），1♀（1967.Ⅷ.8，徳之島）

シロオビアゲハ

1♂（1967.Ⅷ.1，浅間），1♂（1967.Ⅷ.4，下久志），2♂1♀（1967.Ⅷ.7，徳之島町母間），1♀（1967.Ⅷ.9，浅間），1♂（1967.Ⅷ.14，浅間），1♀（1967.Ⅷ.21，浅間）

リュウキュウムラサキ

1♂（1966.Ⅷ.8，古仁屋Ｙ），1♂（1966.Ⅸ.21，名瀬Ｙ），1♂（1966.Ⅸ.23，名瀬Ｙ），1♂（1966.Ⅸ.26，名瀬），1♀（1966.Ｘ.2，名瀬），1♂（1966.Ｘ.9，浦上Ｙ），1♂（1966.Ｘ.22，名瀬），1♀（1966.Ｘ.23，秋名）

ヤエヤマムラサキ（奄美初記録か？）

1♀（1966.Ⅷ.28，名瀬Ｙ），1♂（1966.Ⅸ.26，名瀬）

他に岩井君が住用で1♂，採集者記録不明で1♂1♀がある。

メスアカムラサキ

1♀（1966.Ⅷ.30，名瀬），1♀（1966.Ｘ.1，浦上），2 卵（1966.Ｘ.2，名瀬），1 幼虫（1966.Ｘ.9，名瀬），1 幼虫（1966.Ｘ.12，名瀬），1♀（1966.Ⅺ.27，赤尾木）

アオタテハモドキ

『シロオビアゲハと同じように奄美大島には分布せず，近隣の島にはきわめて普通に見られる』とあるが，2005 年現在シロオビアゲハは奄美大島で普通種であり，アオタテハモドキは徳之島や喜界島でも迷蝶である。

4♂1♀（1967.Ⅷ.20，徳之島伊仙町面縄）

アカボシゴマダラ

『日本では奄美大島にのみ見られるもので，近隣の島にも産しない』とあるが，徳之島では放蝶の記録はあるものの，以前からの土着も可能性として残っている。また，喜界島（今福，1991）や中之島（中峯，2004）でも近年採集されているようである。

1♂（1966.Ⅸ.23，名瀬），2 幼虫（1966.Ⅺ.25，名瀬），3 幼虫（1966.ⅩⅠ.7，名瀬），1 幼虫（1967.Ⅰ.15，小湊），4♂（1967.Ⅳ.15，名瀬），2♀（1967.Ⅳ.16，小湊），4♂（1967.Ⅵ.17，名瀬），3♀（1967.Ⅵ.22，名瀬），1♂（1967.Ⅵ.23，名瀬），3♂1♀（1967.Ⅵ.24，名瀬），12♂4♀（1967.Ⅵ.25，小湊），1♀（1967.Ⅷ.9，小湊），2♀（1967.Ⅷ.15，小湊），1♀（1967.Ⅷ.17，名瀬）

リュウキュウミスジ

『山地では普通に見られるが部落では非常に少ない。３月より出現し，晩秋まで見られる。』

オオシロモンセセリ

『寄生が多く，卵や幼虫はいくらでも採れるが成虫になるものが非常に少ない』

1♂（1966.Ⅸ.4，赤尾木），3♂1♀（1966.Ⅸ.9，名瀬），1♂1♀（1966.Ⅸ.10，名瀬），1♂2♀（1966.Ⅸ.14，名瀬），1♂（1967.Ⅳ.3，朝仁），3♂（1967.Ⅳ.9，名瀬），2♂1♀（1967.Ⅳ.18，朝仁），1♀（1967.Ⅳ.26，名瀬），1♂（1967.Ⅵ.10，名瀬）

オキナワビロードセセリ

若齢幼虫 20 数頭（1967.Ｖ.13，朝仁），

ヒメイチモンジセセリ

『奄美大島においても必ずしも稀ではない。春から秋にかけて，水田や花園でよく出会う。』とある。

2005 年現在，ヒメイチモンジセセリは奄美大島でほとんど見かけられなくなった。この減少がなぜ起こったのか，水田の減少など諸説あるが推測の域を出ない。今後注意して観察したいチョウである。

1♂（1966.Ⅸ.11，名瀬），2♂（1966.Ⅹ.1，浦上），
1♀（1967.Ⅷ.24，名瀬），1♂（1967.Ⅷ.25，小湊），
1♂（1967.Ⅸ.17，根瀬部），

ギンモンウスキシロチョウ

『奄美では夏の間にだけいくらか採集記録があるが，他の時期には全く見られない。これから言っても奄美大島には土着しないものと思われる。琉球ではきわめて普通に見られるようだ』とある。

このギンモンウスキシロチョウは，ムモンウスキシロチョウと同種（季節型の違い）であることが確認され，現在はウスキシロチョウとして扱われている。本種は 2005 年現在きわめて普通に奄美大島にいる。理由はおそらく幼虫の食樹であるナンバンサイカチ（ゴールデンシャワー）などが民家周辺や街路樹として植えられたことであろう。鹿児島県本土でも，南薩フラワーパークなどで秋に発生することが知られている。1967 年現在奄美大島に迷蝶としてしかいなかったということは，非常に興味深い。現在この様子と同じように展開しているのがナミエシロチョウである。ここ数年非常に数が増えている。

1♂（1967.Ⅵ.25，小湊），1♂1♀（1967.Ⅵ.25，小湊：採集者不明），1♀（1967.Ⅶ.2，小湊）他，多数目撃記録有

ツマベニチョウ

1♀（1966.Ⅸ.10，名瀬），1♂（1966.Ⅹ.2，名瀬），
1♂2♀（1966.Ⅸ.16，名瀬），1♂1♀（1966.Ⅺ.3，名瀬），
25 幼虫（1966. Ⅺ.6，名瀬），40 幼虫（1966. Ⅺ.10，名瀬），1♀（1967. Ⅲ.17，名瀬），2♂1♀（1967. Ⅷ.2，徳之島），1♂（1967. Ⅷ.13，徳之島）

イワカワシジミ

1 幼虫（1966. Ⅹ.6，春日町），14 幼虫（1966. Ⅹ.10，浦上），4 幼虫（1966. Ⅹ.12，名瀬），24 幼虫（1966.Ⅺ.3，城），9 幼虫（1966. ⅩⅡ.24，浦上），7 幼虫（1967.Ⅴ.2，名瀬），2 幼虫（1967.Ⅴ.5，浦上），19 幼虫（1967.Ⅵ.14，名瀬），20 幼虫（1967.Ⅵ.15，名瀬），50 幼虫（1967.Ⅵ.216，名瀬），70 幼虫（1967.Ⅵ.17，名瀬），1 幼虫（1967.Ⅶ.21，名瀬）

2005 年現在名瀬市内でこれだけのイワカワシジミ幼虫を採集することはおそらく不可能であろう。山道の低木としてクチナシがよく生えていたのであろうか，非常に個体群密度が高い状況であったようだ。

オジロシジミ

3♂（1966.Ⅹ.16，根瀬部），17♂♀（1967.Ⅷ.20，徳之島），
1♂1♀（1967.Ⅸ.23，浦上），20♂♀（1967.Ⅸ.25，住用），
2♀（1967.Ⅸ.17，小宿），45♂♀（1967.Ⅹ.10，石川），3♂♀（1967.Ⅺ.3，石川）

アマミウラナミシジミ

1♀（1966.Ⅸ.28，名瀬），2♀（1966.Ⅹ.1，浦上），1♀（1967.Ⅲ.15，名瀬），4♀（1967.Ⅵ.3，名瀬），2 幼虫（1967.Ⅵ.25，名瀬），1♂2♀（1967.Ⅷ.14，住用），9♂♀.（1967.Ⅷ.15，小湊），1♀（1967.Ⅷ.20，名瀬）

シルビアシジミ

1♂2♀（1966.Ⅸ.10，名瀬），7♂♀（1966.Ⅹ.16，知根），
3♂♀（1967.Ⅶ.21，名瀬），30♂♀（1967.Ⅷ.1，徳之島）

カバマダラ

当時奄美大島のマダラチョウ科では最普通種となっているようだ。本種は冬眠性を持たない幼虫が越冬するのだが，その際の死亡率がかなり高いと思われる。細々と越冬した個体が秋に大きく個体数を回復する仕組みはまだ解明できておらず，筆者の修士論文の課題でもあった。

300 幼虫（1966.Ⅸ.11，名瀬），4♂6♀（1966.Ⅹ.16，名瀬），
2♂3♀（1966.Ⅺ.3，名瀬），7♂♀（1967.Ⅳ.30，名瀬），
13♂♀（1967.Ⅴ.28，名瀬），9♂♀（1967.Ⅵ.10，名瀬），
11♂♀（1967.Ⅷ.20，徳之島），5♂♀（1967.Ⅸ.10，秋名），
3♂♀（1967.Ⅸ.15，名瀬），5♂♀（1967.Ⅹ.21，名瀬），

スジグロカバマダラ

1♂（1966.Ⅹ.16，根瀬部），3♂（1966.Ⅺ.27，赤尾木），
2♂（1967.Ⅵ.25，小湊），2♂1♀（1967.Ⅷ.13，大浜浜?），
3♂1♀（1967.Ⅹ.10，石川）

ウスイロコノマチョウ

1♀（1966.Ⅸ.5，名瀬），1♂（1966.Ⅸ.26，名瀬），2♂1♀（1966.Ⅹ.2，名瀬），2♂（1966.Ⅹ.24，朝仁），1♀（1967.Ⅳ.9，名瀬），2♀（1967.Ⅷ.25，小湊），2♂（1967.Ⅷ.29，名瀬），1♀（1967.Ⅸ.8，名瀬）

タイワンツバメシジミ　注目種

1♀（1967.Ⅹ.10，大和村大和浜～大金久）

このタイワンツバメの記録は貴重である。本種は本州から沖縄本島北部にかけて分布するとあるが，奄美大島では近年記録が見られない。鹿児島県本土では通常 9 月から 10 月にかけて見られるので，この 10／10 の記録も通常の発生と思われる。しかし，なかなか観察される例が出てこないことから，奄美大島の発生時期にはズレが生じているのかもしれない。大隅半島にも，６月に開花するシバハギ（本種幼虫の食草）があり，そこでは６月に羽化するタイワンツバメシジミが見られるそうである。今後の調査を必要としている種類である。

８号 p.20-32　採集頭数は不明なものが多い。

アオスジアゲハ
（1967.Ⅶ.不明, 沖永良部島), (1967.Ⅷ.4, 与論町朝戸),
シロオビアゲハ
（1967.Ⅶ.27, 沖永良部), (1967.Ⅶ.29, 和泊町古里),
（1967.Ⅷ.1, 与論町大金久), (1967.Ⅷ.3, 与論町茶花),
（1967.Ⅷ.4, 与論町朝戸), (1967.Ⅷ.7, 与論町国頭),
アゲハ（ナミアゲハ）
（1967.Ⅶ.不明, 沖永良部島), (1967.Ⅷ.4, 与論町朝戸),
ナガサキアゲハ
（1967.Ⅶ.29, 和泊町古里), (1967.Ⅷ.4, 与論町朝戸),
キチョウ
（1967.Ⅶ.不明, 沖永良部島), (1967.Ⅷ.4, 与論町朝戸),
モンシロチョウ
（1967.Ⅷ.1, 与論町那間）
ギンモンウスキシロチョウ
1♀目撃（1967.Ⅶ.27, 沖永良部), 1♀目撃（1967.Ⅷ.4, 与論町朝戸),
ツマベニチョウ
1♂目撃（1967.Ⅷ.4, 与論町朝戸),
カバマダラ
（1967.Ⅶ.不明, 沖永良部島), (1967.Ⅷ.7, 与論町国頭),
リュウキュウムラサキ
1♂（1967.Ⅶ.29, 和泊町古里）
ツマグロヒョウモン
（1967.Ⅶ.不明, 沖永良部島), (1967.Ⅷ.3, 与論町茶花),
リュウキュウミスジ
（1967.Ⅷ.4, 与論町朝戸),
ヒメアカタテハ
（1967.Ⅶ.不明, 沖永良部島), (1967.Ⅷ.7, 与論町国頭),
アオタテハモドキ
（1967.Ⅶ.27, 沖永良部), (1967. Ⅶ.29, 和泊町古里),
タテハモドキ
（1967.Ⅶ.27, 沖永良部), (1967.Ⅶ.29, 和泊町古里),
3♂1♀（1967.Ⅶ.29, 和泊町国頭), (1967.Ⅷ.3, 与論町茶花), (1967.Ⅷ.7, 与論町国頭), 目撃（1967.Ⅷ.8, 与論町半崎),
ルリタテハ
（1967.Ⅷ.7, 与論町国頭), 目撃（1967.Ⅷ.8, 与論町半崎),
ヤマトシジミ
（1967.Ⅶ.不明, 沖永良部島), (1967.Ⅷ.4, 与論町朝戸),
シルビアシジミ
（1967.Ⅶ.不明, 沖永良部島), (1967.Ⅷ.4, 与論町朝戸),
チャバネセセリ
（1967.Ⅶ.不明, 沖永良部島),

９号 p.19-20

採集記録ではなく, 特徴をまとめるという解説文が次の種類について書かれている。
ツマベニチョウ, カバマダラ, シロオビアゲハ, イワカワシジミ, アカボシゴマダラ

＊全体を通して

100 周年を越える県立大島高校の歴史の中に, 10 数年ではあったが生物部は活動し, その成果・証として部誌を残すことができている。これは高校時代の活動としては非常に意義深いものであろう。この ORIENS の中に見られた人々の中には, 今でも現役で野外活動・調査研究を行っている方がおられる。一生を左右する経験を高校時代にされたと言うことであろうか。

また, この ORIENS が刊行された時期は, ちょうど奄美大島においてチップ材料として, あるいは林道造成などのために多くの森が切り開かれた時期に一致している。原生林であったとされる八津野も, 現在では大きな道路が通り, 脇への林道には「不法投棄厳禁」の看板と共にチェーンが張られて入山が規制されている。過去の話を聞くと信じられない変化である。

2005 年 7 月に, 埼玉大学教育学部教授の林正美氏が来島され, 数日ご一緒する機会を得た。氏は 1980 代から奄美大島を含む南西諸島にてカメムシやセミなどを対象とし（プライベートでは両生爬虫類や鳥類も), 何度も来島されて調査研究されている。今回は約 10 年ぶりと言うことらしいが, 非常に驚かれていた。「マリウドの滝から湯湾岳が, 一日で二往復できるほど道が整備されているなんて信じられない。以前は未舗装の山道を, 車を擦らないように注意しながらようやく越えた道だった」と聞くと, 当時の奄美の山々の持っていた懐は, いったいどこまで深いものだったのかと思いをはせる。

今後も奄美大島は大きく変化していくことが予想される。もちろん環境への負荷は今までに比べて軽減されていくと思うが, それでも一つの時代の記録として, 地元の最高学府である大島高等学校での活動が必要であると思われる。生徒には「自分たちの興味関心」だけが活動の理由で十分なのであるが, 是非 2005 年現在休部状態にある生物部を再興させたいものである。

（かない　けんいち）

参考文献

藤岡知夫,1975.日本産蝶類大図鑑.講談社,東京.

福田晴夫,2000.日本産チョウ類の生活史研究の歩み.蝶の自然史（大崎直太編著）:232-248,北海道大学図書刊行会,北海道.

今福道夫,1991.アカボシゴマダラを喜界島で採集.蝶研フィールド,6(1):29.

中峯浩司,2004.トカラ列島中之島でアカボシゴマダラを採集.Satsuma,140:55.

安陵,2002.創立百周年記念誌:478.鹿児島県立大島高等学校創立百周年記念事業実行委員会, 鹿児島県.

白水　隆・原　章,1962.原色日本蝶類幼虫図鑑 vol.2.保育社,大阪.

白水　隆,2005.白水隆 日本産蝶類文献データベース.白水隆文庫刊行会,島根.